

中間層の成長とタイ政治社会論 の新動向

浅見 靖 仁

はじめに

タイで「中間層」(チョンチャンクラン)という言葉が頻繁に使われるようになったのは、1992年の「5月流血事件」以降のことである。タイ内外のマスコミは、民主化要求運動において中心的役割を担ったのは中間層であるとし、中間層は今後のタイ社会の動向を大きく左右する力を持つようになったと論じた。¹⁾

タイの中間層はどのような価値観、ライフスタイルを持ち、その成長はタイの政治や経済のあり方どのような影響を与えるのかについて、ここ数年タイ人研究者の間で活発な議論が繰り広げられている。本稿では、中間層に関するタイ人研究者の議論を紹介することによって、タイ社会の新しい動向について考察することにしたい。

期待と失望

1992年5月のスチンダー政権崩壊直後は、なぜ中間層は軍に対して立ち上がったのかという点に関心が集中し、60年代以降の経済成長の結果、中間層がいかに成長し、また彼らがいかに合理主義的、民主主義的な考え方を身につけたかを論ずる記事や論文がタイの新聞や雑誌を賑わした。まさに中間層礼讃論花盛りといった感じであった。

しかし、スチンダー政権崩壊後のユーフォリアはあまり長くは続かなかった。92年9月に行われた総選挙は、「天使の党」(バックテープ)と「悪魔の党」(バックマーン)の間の戦いだといわれた。「悪魔の党」とは、92年4月にスチンダー将軍が首相となる意思を表明した際にそれを支持した5つの政党を指し、「天使の党」とはその時スチンダーの首相就任に反対の意を表明した4つの政党のことである。選挙の結果は、「天使の党」派が185議席を獲得し、定数360の下院の過半数をかるうじて制した。この選挙では中間層の多くが「天使の党」を応援したといわれる。中間層が多く住むバンコクでは「天使の党」が35議席のうち32議席を占めたことから、中間層が「天使の党」側を強く支持したことは明らかである。中間層にとって92年9月の選挙結果は、「天使の党」が「悪魔の党」に勝ったという点においては一種の安堵感を与えるものであったが、しかしその一方で、その差がほんのわずかでしかなかったことに失望を感じさせられるものであった。

バンコクでは圧倒的な勝利を取めた「天使の党」がタイ全体では「悪魔の党」にほんのわずかの差し

かつけることができなかったのは、農村部で「悪魔の党」が大量に議席を稼いだことによる。そして農村部で「悪魔の党」が大量の票を獲得することができた背景には都市と農村の間の大きな格差があることは誰の目にも明らかであった。

5月流血事件後に盛んになされた中間層礼讃論がいうように、タイの中間層が本当に自らの命を賭してまで民主化を求めているのならば、中間層はスチンダー将軍とそのとりまき数人が失脚したことだけに満足するのではなく、都市と農村の格差是正のために行動を起こさずにはいられなかった。しかし実際には中間層の多くはそのような行動を起こそうとはしなかった。こうした状況の中で中間層礼讃論は急速に影をひそめることになったのである。

92年11月にチュラーロンコーン大学で開かれた「中間層とタイにおける民主主義の発展」と題するセミナーでは、タイを代表する10人の学者が報告をおこなったが、そこで議論の中心となったのは、中間層はなぜ立ち上がったかではなく、中間層はなぜさらなる社会改革を求めようとしなかったのかであった。このセミナーでなされた報告は1冊の本としてまとめられ、『タイの民主化の流れと中間層』と題して93年5月に出版された。ちょうど「5月流血事件」の1周年に合わせて出版されたこともあって、この種の学術的な出版物には珍しくタイのマスコミに大きく取り上げられ、その後のタイの中間層論に大きな影響を与えることになった。

チェンマイ大学のニティ・イヨウシーウォンは『タイの民主化の流れと中間層』に収められた論文の中で、中間層の特徴として、中間層はその生計を政府高官を頂点とする伝統的なパトロン-クライアント関係よりも市場機構により多く依存しているという点を上げている。とはいっても、中間層は伝統的なパトロン-クライアント関係と全く無関係に成長してきたわけではなく、利用できる時には伝統的なパトロン-クライアント関係をも利用してきたが、タイ経済が複雑化、高度化するにつれて、パトロン-クライアント関係よりも近代的な契約関係に頼る割合が増えてきたとニティは述べている。こうして成長してきた中間層は農民や下級役人よりも政府に対して比較的自由的な立場にあり、「近代的」、「合理的」な思考方法を身につけているとニティは言う。ニティの論文はその前半だけを読むと「5月流血事件」後に流布した中間層礼讃論とあまり変わるとこ

ろはない。ところが、「自由」で「合理主義的」な中間層はさらなる民主化実現のために指導的役割を果たすことができるかどうかを論じた後半部分では、極めて否定的な見解を述べている。タイの中間層は、「自由な個人」(エーカブッコン・ティー・ベン・イサラ)となることには成功したが、「自由な個人」同士の間でビジネス上の契約関係以外の社会的関係をどう結ぶかについて、新しいモデルを構築できないため、「自由」を手に入れても社会を主体的に変革していくために自らを組織して政治に「参加」していくことはできないというのである。またさらに、中間層の価値観やライフスタイルは、人口の多くを占める農民のそれとは大きく異なっており、むしろ支配層の価値観やライフスタイルの方に近く、タイの中間層は文化的には依然として支配層に依存、従属しているので、さらなる社会変革の先頭に立つことは期待できないと結論づけている。²⁾

同じ本の中でチュラーロンコーン大学のパーサク・ボンパイットは、韓国の例を引きながら、中間層は独裁政権の打倒のためには立ち上がっても、労働者や農民のための社会改革には拒否反応を示しがちであるとして、ニティと同様タイでもさらなる民主化のために中間層が積極的に行動することはあまり期待できないと述べている。³⁾



タイの自動車保有台数は1980年から90年までの10年間に170万台から760万台へと4倍以上に増えた

タマサート大学のアネーク・ラオタンマタットは、中間層の一番の関心はタイ経済が成長し続けることができるかどうかにあるという。1987年以降の高度成長の過程で中間層の所得が増加したため、それまではとても手が届かないと思っていた自家用車や1戸建ての家にかつて手が届くようになり、中間層の

多くがここ数年かなりの無理をしてでもローンを組んで車や家を購入したとアネークは言う。そうした中間層にとって一番の心配は、タイ経済が失速して自分の収入も減り、せっかく手に入れた車や家を手放さなければならなくなることだということである。92年5月に中間層がスチンダー政権反対運動に立ち上がったのも、スチンダー将軍が前言を翻して選挙にも出ないで首相になろうとしたことに対して強い憤りを感じたということもさることながら、スチンダーが汚職で悪名高い政治家を数多く閣僚に任命したことから、権力亡者の軍人と汚職政治家に政治を任せておいてはタイの経済はだめになってしまうという危機感を抱いたことによるところが大きいとアネークは分析する。⁴⁾

中間層がどのような政権を支持するかは、どのような政権が経済成長の持続を可能にすると中間層が考えるかによるとアネークは言う。そして議会制民主主義が混乱を続ければ、92年5月には民主化を支持した中間層が今度は独裁的な政権を求めるという可能性も完全には否定できないとさえ言っている。アネークは、すでに中間層の多くが議会制民主主義に対して失望しているという。選挙民の多くを占める農民が貧しく、教育程度が低く、「愚か」である限りは、選挙をしても農村部で金を多くバラまく政党が議席を多く獲得することになり、タイにおいては「効率的」で「正しい」政府は議会制民主主義には期待できないと中間層の多くが考えるようになっていくというのである。アネーク自身はその著作の中で、都市部に強い政党と農村部に強い政党に違いがあるのは、都市部の住民は「賢い」から「いい」政党を選ぶのに対し、農村部の住民は「愚か」だから「悪い」政党を選ぶことによるというよりも、都市の中間層と農民の間には利害が一致しない点が多くあり、また政府に期待するものが両者の間では異なることによるということを理解しなければならないと強調している。⁵⁾

『タイの民主化の流れと中間層』が出版された後、タイの中間層の政治的役割に関する議論はやや下火になり、マスコミの中間層に対する関心は政治的役割よりも彼らの消費行動やライフスタイルのありように移っていった。中間層の購買力の伸長は著しく、中間層の好みであった商品・サービスを生産し、提供できるかが企業の業績を大きく左右するようになったのである。93年から94年にかけてタイのビジネス誌は競うようにして中間層のライフスタイルや

価値観に関する特集記事を載せるようになった。

しかし94年2月に出版されたタマサート大学のカシアン・テーチャピーラの『龍が歩んだ道を振り返る』と題する本によって、中間層の成長がタイ社会にもたらす影響に対する関心はその経済的側面だけでなく政治的側面にも再び向けられることになった。

『龍が歩んだ道を振り返る』は、カシアンがタイ有数の日刊ビジネス誌『プーチャットカーン』に書いたコラムのいくつかを2つの学術論文とともに1冊の本にまとめたものである。『プーチャットカーン』に載ったカシアンのコラムは以前から多くの人から注目され、いろいろな議論の対象となっていたが、1冊の本にまとめられて出版されたことによって彼の中間層の政治文化論が改めて注目されることになったのである。⁶⁾

カシアンの中間層論が注目を浴びた大きな理由の一つは、タイの中間層の大部分が中国系の住民であるという誰もが知ってながら敢えて語ろうとはしなかった点について、大胆な議論を展開したことにある。チュラーロンコーン大学から出版された『タイの民主化の流れと中間層』には10人のタイ人研究者が寄稿しているが中国系住民がタイの中間層の多くを占めているという基本的事実にはっきりと言及した論文は一つもない。

カシアンの議論について見ていく前に、ここで少しタイの中間層の社会経済的特性について述べておくことにしたい。

タイの中間層の社会経済的特性

一般に「中間層」は、その所得が「上流階級」と「下層階級」の間である社会階層を指すとされる。ところが、最近タイで「中間層」を対象とした社会調査等が行われる場合、「中間層」の所得の下限(つまり年収が何万バーツ以上あれば中間層とみなされるかという基準)だけが設定され、所得の上限(つまり年収が何万バーツ以上に達したら中間層ではなく上流階級とみなされるかという基準)は設けられない場合が多い。タイの経済雑誌『プーチャットカーン』が昨年行った調査でも、年収120,000バーツ以上を中間層の条件の一つとしているが、年収の上限は特に設けられていない。⁷⁾

これは、現代タイ社会においては「中間層」と「下層階級」を区別する際には所得レベルが非常に重要な要素となるが、「中間層」と「上流階級」を区別する際には所得レベルは必ずしも重要な要素で

はないということを反映したものだと思われる。では、「中間層」と「上流階級」を区別する際に重要となるのは何かといえば、おそらく価値観とライフスタイルであろう。

筆者は東京大学の末廣昭教授らとともにタイ人研究者の協力を得て、昨年8月にタイの大学生427人を対象にアンケート調査を行った。その中で「中間層」を最も特徴づけるものは何かという質問も入れておいたのだが、その結果をみると、有効回答のうち43.6%が収入だと答え、39.8%が価値観及び生活スタイルだと答えた。一般に「中間層」という概念は所得レベルを分類基準にする概念であるので、所得と答えた学生が一番多かったことはある意味で当然だと言えるが、それとあまり変わらない数の学生が「価値観及び生活スタイル」と答えたことは注目に値する。タイの中間層は単に所得が上層と下層の間であるというだけでなく、その価値観や生活スタイルにおいても他の階層と異なる集団としてタイ人に認識されていることを反映したものだといえよう。

伝統的なタイ社会においては「上流階級」とはすなわち王族及び貴族のことであった。中国系住民が大多数を占める「中間層」とタイの伝統的宮廷文化の影響を色濃く残す「貴族社会」とでは価値観やライフスタイルに大きな違いがある。ところがタイ経済が急速に発展するにつれて「中間層」の所得が上昇する一方で、貴族やその末裔の中には経済的に低迷する者が少なくなく、両者の間の所得レベルの違いは曖昧なものとなったのである。タイにおいては所得レベルに上限を設けることによって単純に「中間層」と「上流階級」を区別することが難しいのはこのためである。

なお、先に紹介したようにチェンマイ大学のニティは、タイの中間層は支配層の価値観やライフスタイルの多くをそのまま受け入れていると述べているが、彼は中間層の多くが中国系住民であるという事実を目をつぶってしまったために、中間層と支配層の間の価値観やライフスタイルの違いを過小評価してしまったように思われる。

タイの経済誌『プーチャットカーン』が昨年行った調査では年収が120,000バーツ以上であることが中間層の条件の一つとされたことはすでに先に述べた。筆者たちがおこなった学生に対するアンケート調査でも「中間層と考えられるためには最低どれだけの月収が必要だと思うか」という質問をしたが、それに対する答えの平均値は12,882バーツ、つまり

年収にすると154,584バーツであり、『プーチャットカーン』の基準と大体一致している。

なお、1991年の統計によるとタイの1人当たりGDPは44,120バーツであるので、年収120,000～150,000バーツというのは、タイ社会全体から見るとかなりの高収入ということになる。チュラーロンコーン大学のパーズック・ポンパイチットはセンサスデータをもとにタイの中間層の数を約520万と推測しているが、これはタイの全人口の約10%にあたる。⁸⁾ タイの「中間層」は、日本の「中流」階級やアメリカの middle class とは異なり、その国のマジョリティーを占める集団ではないのである。

では彼らが自らを社会の中で特に「恵まれた」階層だと考えているかという、必ずしもそうではない。1人当たりの総生産額をバンコクとそれ以外の地域に分けて見てみると、バンコク以外の地域の1人当たり総生産額は25,303バーツで「中間層」の下限収入の6分の1程度でしかないのに対し、バンコクの1人当たり総生産額は142,302バーツで「中間層」の下限収入とほぼ同じになっている。つまりタイの中間層は地域的にはバンコクに集中しており、タイ全体から見るとかなり恵まれた少数であるものの、バンコクだけを見てみると平均的な収入のマジョリティーの集団ということになるのである。バンコクの中間層は自らの暮らし振りを他と比較する場合、農村に住んでいるタイ人ではなく、同じバンコクに住んでいる人々と比較することが多いため、彼らには自分たちが特に恵まれた立場にあるという意識はそれほど強くはない。

ブルジョワ文化大革命から市民社会成立へ?

カシアンは、92年9月24日の『プーチャットカーン』に「龍が歩んだ道を振り返る」というコラムを書いたが、このコラムは発表直後から大きな反響を呼び、賛否両論を巻き起こした。⁹⁾ このコラムは94年2月に出版された彼の本の最初の章として収められており、本の書名もこのコラムの題名をそのまま使っている。「龍が歩んだ道を振り返る」というコラムは当時タイで大ヒットしていた『龍が歩んだ道』というテレビドラマについて論じたものである。『龍が歩んだ道』は中国から裸一貫でタイにやってきた主人公が不断の努力と才覚によってさまざまな困難を乗り越えて、ついには大財閥を築いていった様子を描いたものである。一代でバンコク銀行財閥を築き上げたチン・ソーポンパニットとやはり同じ

く一代でサハパタナピブーン財閥を築き上げたティーム・チョークワタナーをモデルにして物語が書かれたと言われている。

これまでタイの映画やテレビドラマでは中国からの移民は、汚い手口を使って金を儲けることばかりを考えている悪徳商人か無教養でつたないタイ語しかしゃべれない道化者として描かれることが多かった。しかし『龍が歩んだ道』では勤勉で独立独歩の精神が強く義理を重んじるといった主人公の性格が肯定的に描かれただけでなく、主人公が明らかに中国語なまりとわかるタイ語で堂々とタイの伝統的上流階級のライフスタイルや価値観を批判する場面が何度も描かれたのである。

カシアンは『龍が歩んだ道』が放送され、しかもそれが大ヒットしたということは一種の文化大革命であり、文化面でのブルジョワ革命だといえる。¹⁰⁾ 他のタイの政治学者の多くが、92年の「5月流血事件」以降中間層は沈黙してしまい、結局タイの政治状況は91年2月のクーデタ前の状況に戻っただけではないのかと考えるようになっていたのに対し、カシアンは92年の「5月流血事件」はタイの中間層の意識に大きな変化をもたらし、そうした中間層の意識変化がタイの政治文化を大きくかえつつあると主張する。

インドネシアやマレーシアとは違い、タイでは中国人とタイ人の間の同化が非常に進んでおり、中国系タイ人が中国系であるというだけで差別的な扱いを受けるといったことはあまりない。しかしカシアンは、これまでは中国系タイ人はタイ社会に受け入れられるためには「タイ人」にならなければならないと教えられてきたという。その際同化の目標とされた「タイ人」像は、19世紀末からの国家建設の過程で「国家」が上から押し付けた人為的なものであり、それは中国系タイ人だけでなく、タイの人口の大多数を占める農民とも異なる「タイ人」像であった。¹¹⁾

テレビドラマ『龍が歩んだ道』に象徴されるように、最近タイの中間層の間で自らの文化的ルーツである「中国的なるもの」(クワームベンチーン)を見直すという気運が高まってきていることは、これまで上から押し付けられてきた「タイ人」像を問い直すことにつながり、「上からのナショナリズム」にかわって「下からのナショナリズム」を作り上げることに繋がるとカシアンは考える。カシアンはアメリカ留学時代に、彼の両親が中国出身だと知った中国からの留学生と同じ中国人として扱われそう

になった際に強い抵抗感を感じたという個人的な体験も引き合いに出しながら、中国系タイ人の間に見られる「中国的なるもの」見直しの気運は、「中国に住んでいる中国人」との一体感を強める方向には向かわず、自らの中にある「中国的なるもの」を恥ずべきものとして隠さなくても真正銘の「タイ人」であると感じることができるような新たなタイ人アイデンティティーのあり方を模索する方向に向かっているという。¹²⁾

カシアンはまた、タイ経済が成長を続けて行くためには、世界市場での厳しい競争に勝ち抜いていかなければならず、そのためにはタイ社会を構成しているさまざまな文化的背景をもった集団が何らかの一体感をもつ必要があるが、人為的に作り出された特定の「タイ人」像に完全に同化することを要求する従来の「上からのナショナリズム」では真の一体感を生み出すことはできないともいう。それを可能にするためには多文化主義的な寛容なナショナリズムが形成されなければならないと、彼は主張するのである。¹³⁾

カシアンは、中国系タイ人が中国系であることを以前のように恥じることなく堂々と明らかにするようになったのは、92年の「5月流血事件」の経験から、伝統的なタイの支配層よりもむしろ自分たちの方が真剣にタイの将来のことを考えていると感じ、上から押し付けられた「タイ人」像に無理やり自分を同化させなくても、今のままですでに自分たちは立派なタイ人なのだとの確信するようになったことによると解釈する。そして中国系タイ人が「上からのナショナリズム」に異議を唱え出したことは、東北タイの農民たちも彼らがつラオ文化の伝統を否定しなくても、タイ人たり得るのだという考え方につながる可能性があるという。¹⁴⁾

カシアンは、テレビ番組やラジオのトークショーなどを分析することによって、少なくともバンコクの間層の間では「上からのナショナリズム」とは大きく性格を異にする一体感がかなり育っていると主張する。そして国家が上から押し付ける一体感とは別の一体感がタイ社会に存在するようになったということは、タイに市民社会(プラチャーサンコム)が成立しつつあるということにはかならないというのである。

楽観論か悲観論か

すでに述べたようにタイでは「中間層」という言

葉が頻繁に使われるようになっているにもかかわらず、「中間層」と「上層」との間にもどのように境界線を引くかについて研究者の間でも合意はできていない。カシアンの場合、資本家層の少なくとも一部は中間層と価値観を共有していると考えられる。よくタイの経営者には「政治的実業家」(ナックトゥラキット・カーンムアン)と「専門的実業家」(ナックトゥラキット・ムーアーチープ)の2つのタイプがあるといわれる。「政治的実業家」は経営手腕よりも政治権力との結び付きにものを言わせて事業の拡大をはかろうとするのに対し、「専門的実業家」は政界や官界の有力者とのパトロンクライアント関係よりも経営や技術に関する自らの専門知識によって事業の拡大をはかろうするとされる。カシアンは中間層と「専門的実業家」の間には価値観に多くの共通点があることを強調する。



抗議のために日本大使館前に集まった
ストライキ中の労働者

タイ経済が成長し続けることを強く望んでいる中間層は、そのためには経済政策の決定過程において「政治的実業家」よりも「専門的実業家」の発言力が大きくなった方がいいと考えており、また中間層の中にはいつかは自分(もしくは自分の子供)も『龍の歩んだ道』の主人公のように「専門的実業家」の1人となることを夢見ている者が少なくない。また、「政治的実業家」や「家産的」性格を残す官僚たちに対してまだ完全には優位な立場にたっていない「専門的実業家」にとってそれらの「守旧的」な勢力に政治的に対抗しなければならない時には「中間層」の支持が非常に重要なものとなる。こうしたことから、「中間層」と「専門的実業家」の間には、一種の一体感が生じてきているというのである。

カシアンは、タイの中間層が下層のタイ人との間



スリン県の農村にて

にも共通の一体感を持つようになるかどうかはまだ今後の推移を見ないとわからないと述べているが、現在バンコクの間層が抱えている一体感は中国系でないタイ人を除外するような性質のものではなく、多文化的な性格のものであることを彼は強調しており、先に紹介したニティやパースックよりも「楽観的」な見方をしている。

パースックやアネークが中間層と下層の間には基本的な利害の対立があるため両者の間に同盟関係が成立することは容易ではないと考えるのに対し、カシアンは、タイ経済は工業製品の輸出にますます強く依存するようになっており、中間層も下層もその生活水準を向上させるためには競争の激しい世界市場でタイの企業が勝ち残ることができるようにする必要があり、そのためには資本家層と中間層との間だけでなく下層との間にも一定の同盟関係を結ぶことが中間層にとっても下層にとっても望ましいことであるので、そうした可能性は十分にあると考える。¹⁵⁾

カシアンは「楽観的」に過ぎるであろうか。筆者は二重の意味でそうは思わない。まず第1に中間層と下層との間に一定の同盟関係が成立する可能性はパースックらが考えているよりは高いように思われる。第2に、もしカシアンがいうように世界市場での激しい競争に生き残っていくために下層と中間層の間に一定の同盟関係が成立したとしても、それが必ずしも「楽観的」ということができるほど下層にとってよい結果をもたらすとは思えないからである。「同盟」は同盟参加者に均しく利益を与えるものではないことは、国際関係の歴史を見れば明らかである。

テレビドラマ『龍の歩んだ道』の主人公アーリヤンは、彼の恋敵となったタイの伝統的な上流階級出身の男から「他所からやって来てタイに居させてもらっているくせに偉そうな口をたたくんじゃない」と言われたのに対し、強い中国訛りのタイ語で「確かに俺はタイの大地にはお世話になっているが、お前の世話になっているわけじゃない。汗水垂らしてまじめに働いているタイ人のことは俺も尊敬するが、お前のようにろくに働きもしないのに親の資産のおかげで偉そうな顔して遊んで暮らしているようなタイ人に頭を下げるつもりは毛頭ない。」と言いつつ返した。この会話がタイ全国のテレビで放送された時、中間層の多くはアーリヤンに喝采を送ったであろうが、上流階級の中には苦虫を噛みつぶしたような顔でこの場面を見た者も少なくなかったであろう。では、タイの農民や工場労働者たちはこの場面をどんな気持ちで見ていたのだろうか。『龍の歩んだ道』では人気女優ブリーヤーヌット・パーンプラダップ演ずるニヤムは、ハンサムで名門大学も卒業している上流階級出身の男の方ではなく、正規の学校教育などほとんど受けておらず中国訛りのタイ語しかしゃべれないアーリヤンの方に惹かれていったのであるが、アーリヤンは農民や労働者も惹き付けることができるだろうか。またアーリヤンはニヤムだけでなく、農民や労働者も幸せにすることができるだろうか。

楽観するにせよ、悲観するにせよ、今後のタイ社会の行く先を知るためには、「中間層」から目を離すことができないことだけは確かである。

〔注〕

- 1) 「中間層」という言葉がタイで一種の流行語のようになったのは1992年の「5月流血事件」以降のことであるが、「中間層」という言葉自体はそれ以前から使われていた。この言葉が最初に使われたのはいつかについてはまだ定説はないが、1950～60年代にはウィットワタカーンやサリットがその著作や演説の中で「中間層」という言葉を使っていたことが知られている。
- 2) Nithi Aewsriwong, “Wathanatham khong Khonchanklang Thai”(タイ中間層の文化)in Sungsidh Piriya-rangsana & Pasuk Phongpaichit (eds.) *Chonchanklang bon Krasae Prachathipatai Thai* (タイの民主化の流れと中間層) Bangkok: The Political Economy Center, Chulalongkorn University, 1993, pp. 49-65. なお、この論文はタマサート大学が発行している *Warasarn Thammasat*, Vol. 19, No. 1 (Jan-Apr. 1993) pp. 31-41にも掲載されている。
- 3) Pasuk Phongpaichit, “Botbat Chonchanklang nai Setthakit lae Karnmuang khong Prathet Asia NICs lae Thai”(アジアNICsとタイにおける中間層の政治経済的役割) in Sungsidh Piriya-rangsana & Pasuk Phongpaichit(eds.) *Ibid.*, pp. 49-65.
- 4) Anek Laothamathas, “Thurakit bon Senthang Prachathipatai”(民主主義への道とビジネス界)in Sungsidh Piriya-rangsana & Pasuk Phongpaichit(eds.) *Ibid.*, p. 186.
- 5) Anek Laothamathas, *Mob Mwu twu: Chonchanklang lae Nakthurakit kab Phatthana-karn Prachathipatai*(携帯電話を持った群衆:中間層及びビジネスマンと民主主義の発展) Bangkok: Matichon Press, 1993, pp. 90-96; Anek Laothamathas, “Rwu pen Yak thi Phwung Twun: Chonchanklang kab Karnmuang Thai,” (目覚めたばかりの巨人?: 中間層とタイ政治) *Warasarn Thammasat*, Vol. 19, No. 1 (Jan-Apr. 1993) pp. 64-68.
- 6) Kasian Tejapira, *Lae Lod Lai Mangkorn: Ruam Kho Khien Waduai Khwampenjin nai Sayam* (龍の歩んだ道を振り返る: シャンにおける中国的なるものに関する論文集) Bangkok: Khobfai Press, 1994.
- 7) “Rupbaeb Karnchai Chiwit khong Khonrunmai”(新世代のライフスタイル)in Sen Luad Khod, Bangkok: Phuchatkarn Press, 1994, p. 95-101.
- 8) Sungsidh Piriya-rangsana & Pasuk Phongpaichit, “Khamnam”(序文)in Sungsidh Piriya-rangsana & Pasuk Phongpaichit(eds.) *Ibid.*, pp. 19.
- 9) カシアのコラムに対する批判・反論のいくつかは、“Wiwatha: Lod Lai Mangkorn,” (『龍の歩んだ道』論争) *Ratthasatsarn*, Vol. 18, No. 2 (Oct. 1992) pp. 101-127に収められている。
- 10) Kasian Tejapira, “Lae Lod Lai Mangkorn,” (龍の歩んだ道を振り返る) *Phuchatkarn Raiwan*, Sept. 24, 1992, pp. 17.
- 11) この点については、Kasian Tejapira, *Jintanakam Chart Thi Mai Pen Chumchon: Khonchanklang Lukjin kab Chartniyom doi Rat khong Thai*(想像の非共同体: 中国系タイ人である中間層と国家による上からのタイ・ナショナリズム) Bangkok: Khled Thai Press, 1994を参照。
- 12) Kasian Tejapira, “Yaa Yud Khae Khwampenjin”(中国的なるものだけに留まっていたはならない) *Phuchatkarn Raiwan*, Oct. 1, 1992, pp. 17; Kasian Tejapira, “Khwampenjin nai Sayam”(シャンにおける中国的なるもの) *Phuchatkarn Raiwan*, Aug. 5, 1993, p. 33.
- 13) Kasian Tejapira, “Yaa Yud Khae Khwampenjin”(中国的なるものだけに留まっていたはならない) *Phuchatkarn Raiwan*, Oct. 1, 1992, p. 17; Kasian Tejapira, “Chartniyom Sayam nai Yuk Lokanuwat”(国際化時代のシャン・ナショナリズム) *Phuchatkarn Raiwan*, Nov. 5, 1992, pp. 16.
- 14) Kasian Tejapira, “Chartniyom Sayam nai Yuk Lokanuwat”(国際化時代のシャン・ナショナリズム) *Phuchatkarn Raiwan*, Nov. 5, 1992, p. 16.
- 15) カシアのこの点に関する議論はコーネル大学のピーター・カッツェンスタインが提唱した、貿易に国の経済の多くの部分を依存する小国にとっては、国際的経済競争が激しくなればなるほど、国内で階級対立をしている「余裕」はなくなり、国内の主要な階級、階層、社会集団すべてを包括するようなコーポラティズム的な政治システムが求められるようになるという説に強く影響を受けているようである。cf. Peter Katzenstein, *Small States in World Markets: Industrial Policy in Europe*, Ithaca: Cornell University Press, 1985.